

そもそも数学の授業とは何ぞや

工学部 情報・メディア工学科3年 平林 和磨

自分は情報・メディア工学科なので、数学については当然熟知しているべき物でなければなりませんし、専門教育科目でも、微分方程式やフーリエ変換など、数学の分野を習得します。とはいえ、情報やコンピュータに関することを学ぶだけでなく、数学を純粋に学ぶ（かなりの数学好きから言えば楽しむでしょうか…）心意気がおろそかになるとまずいと思い、数学に関する共通教育科目を探していました。

約1年半前、「数の世界」という数学の講義を受けていました。そのとき、ピタゴラス数や素数の性質など、純粋に数学として学んでいきました（「良」という結果になってしまったことが悔しかったことは憶えています…）。今回は何があるかと思い探した結果、目にとまったのがこの「数学的活動」です。

一番初めに受けた時、簡単な概念ばかりで、新鮮味がないように感じられました。しかしこの講義は、数学が単なる『計算術』でおわっているのではなく、その計算を現実に活かしていく、まさに数学を通して『活動』していくということをやっていたのです。高校の数学や今までの教科で受けてきた数学の授業では、ただ単に計算の概念や計算法を主点において学んでいたのですが、今回の科目ではそれらとは逆に、計算法を学ぶことではなく、計算を用いて現実問題にどう対応するかということを主点に置いて講義を進めていました。数学の新鮮な概念を教えるのが数学の講義であると考えていた自分にとって、この講義は別の意味で新鮮な物と感じ、自分でもかなり積極的だと思えるほどこの講義の勉強に取り組めました。

正直、計算法を主点に置いた授業に慣れていた自分にとって、最初は「この講義は退屈なもの」と考えていました。しかし、この講義を全て習得し終わった後、数学を学ぶにおいて計算術以外にもう一つ重要な要素があることに気づかされました。数学の授業は単に計算術を伝授する物ではなく、それを『どう活かしかるか』。この二つがあって初めて数学ができる人になれると思いました。そう思うと、益々数学に一生懸命になれる気がしました。